花祭

柳田國男序
折口信夫跋
早川孝太郎著

限定三百部

内容見本

發兌

東京市神田區北甲賀町四番地
岡書院
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

體裁　菊判前編後編別冊
兩編通じて
千六百五十頁　挿畫二百
四十個　地圖四色刷石版
色刷コロタイプ等五十餘枚　天金特織紬裝

定價　廿五圓

送料　東京市内　十二錢
内地　六十三錢
其他　九十錢

本書に就て

岡書院

著者早川孝太郎氏は此の地に最初の足跡を印せられてより七年、花祭の文化圏二十餘ケ村を行事あれば訪れ、閑暇あればゆき、彼等と共に語り、彼等と共に歌ひもし、踊りもし、花祭の外形的形式から、其の感情の奥底迄にも其の存在の意義を究められ、答へられる限りの資料を蒐集し、科學的に整理、提示せられたのが本書である。然かもこの採集には我國フォークロアの書宿柳田國男先生始め折口信夫先生の關與せられてゐたといふ事實は觀察の忠實と記述の正確とを證するに足るといひ得るであらう。

玆に弊書院は山の香尚經新しい資料の一大推積を刊行し、廣く江湖の清鑒に供せんとする次第である。

前文十九行略

耆宿＝キシュク　年寄の高い老人

江湖＝世の中、世間
清鑒＝明らかに見分ける

（現物　山本所有）

ねだん　あれこれ

『花祭伝説』に特価20円とある。

定価25円とあるが予約すると20円だった。

当時の物価（早川照次氏談）
・米1俵　8円
・背広三ツ揃　25円
・橋場村役場吏員月給24円

（三州神田覚之書）

『設楽』編集発行人　永江土岐次先生談
・小学校の年間備品購入費は25円位だった。
・花祭を行っている校区の学校は1冊ずつ買ったと思う。

初版本のねだん
昭和5年　25円（予約20円）
昭和24年　2,500円　豊橋の古本屋　浅井重雄先生
昭和50年ごろ　8万円　名古屋の古本屋　鈴木太吉先生

『花祭』複刻版
昭和33年　抄縮版　岩崎書店　480円
昭和63年　国書刊行会（新版）29,000円

昭和5年（41歳）

（右の写真より取出し拡大　山本）

渡邊敬三を囲み花祭一行の記念写真。早川孝太郎、藤木喜久麿は一行を迎えた側で、当時のアチックミューゼアム所員。神谷徳一、和合俊一、藤谷源太郎は足込の人、ほかは三ツ瀬と中在家の人々である。『柏葉拾遺』より。

（全集12　未来社）

柳田国男を始めとする学者、研究者、作家など、お歴歴の方々、約七十名が見学をされた。

早川孝太郎多年苦心の大著『花祭』出版記念のため、たまたま綱町邸改造竣工を機に三河本郷三ツ瀬の花祭一行を綱町邸に招き一力花を勧請執行。柳田國男、泉鏡花、石井健吉、石黒忠篤、武井武雄、新村出、市河三喜、前田胥郎、小林古径、穂積重遠、白鳥庫吉、幸田成友、三村清太郎、飯塚友一郎、石本己四雄、宇野円空、橋本傳左衛門、田村剛、宮尾しげを、松平斉光、那須皓、竹友藻風、石田幹之助、松本信廣、伊波普猷、樋畑雪湖、野上豊一郎、小野武夫、東畑精一、土屋喬雄、金田一京助、有賀喜左衛門、宮本瑞、宮本勢助、木村修三、明石照男、佐々木修二郎、尾上登太郎、小池厚之助、木内信胤、林正道、菊池健三、井上薫、尾高鮮之助外数十名来会。すべて花祭の抜粋篇で、三ツ舞、四ツ舞、剣の舞の外湯囃子まで少しずつ舞う。来会者には供覧し得ざりし祭前後の滝祭等の祭事も行なってもらい少しずつ十六ミリに収めた。（『柏葉拾遺』の解説）

外数十名の中には関屋宮内次官もいたようで、次官の執奏によって『花祭』は天覧に供されることになった。限定三〇〇部のうち第一〇一冊を奉献することにして、早川は四月一九日に宮内庁へ手続きをした。

一行を引き連れて上京した原田清氏は、日記に「花祭実演執行ハ此日午后五時ヨリ十時迄異状盛観」と記し、宮内次官が参観していたことから「花祭」が天覧に供されることについて「早川氏ノ花祭ハ言フモ更也北設楽郡ニモ光アル栄誉ノ愉快禁ズ能ハザル也」とその喜びを手紙に認めている。（全集12　須藤氏記）

錄一一二図「さかき」へんべの二

（花祭　岡書院）

花祭、東京渋沢邸で初公演

今から五十年前、中在家の花祭が、渋沢敬三邸で公演されたことがある。これは、渋沢が自宅の竣祝（しゅん）を行うと同時に孝太郎著『花祭』の発刊の労をねぎらうためのものでもあった。

その時、同行した沼田一美氏（鳳来町富里）は次のように話をされた。

古物商のような人が、何年も前から佐々木の家へ出入りしており、この人と原田清氏（東栄町三ツ瀬）が先達で連れて行ってくれた。行く車中、偉い方たちが集まるから、「やい。」「おう。」のことばは慎むこと。やたらに出歩いてはいけない。水洗便所をうまく使うことなど注意をされたことを覚えている。

モーニングや背広姿の偉い方たちの前で、夜十二時半ぐらいまで緊張して舞った。味噌から串までこちらから持参して作った五平餅を、見学の方たちに差し上げもした。

この古物商のような人とは、孝太郎のことであり、花祭公演にあたっては、設営や演出に細かい配慮をされていたことが伺える。

昭和55年度新城ふるさと講座、7.19(土)　山本好美が講演を行った資料の一部

沼田一美氏

提供　沼田忠志氏

（佐々木の家とは佐々木喜一氏宅のこと）

昭和6年（42歳）

飛島へ渡ったのは、澁澤敬三（左より三人目）、岡本信三、酒井仁、高橋文太郎、早川孝太郎（右端）の五人。代々名主をしていた家、勝浦の鈴木延次一家と記念写真。

屋根裏博物館を意味するというアチックミューゼアムは、澁澤敬三が自費で設立した研究所である。澁澤はその研究所の所員、同人ともよく一緒に旅をした。津軽（青森県）への旅のときは、早川の『羽後飛島圖誌』（大正一四年刊）の地にも立ちよった。昭和六年（一九三一）五月三一日に酒田港から渡り、六月二日の朝、島を離れた。

（全集12 未来社）

早川は澁沢敬三の設立したアチックの民具蒐集に協力をおしまなかった。

北設楽へ花祭の調査に来るたび、その帰りには村人からいただいた民具を、リュックサック一杯に詰め込んで東海道線に乗った。車中では時々お巡りさんから闇商人にまちがえられたり盗品ではないか――と疑われたりもしたそうな。（実弟照次談）

昭和8年（44歳）

話をきく会

（昭和八年二月二十七日夜、みよ［しにて雪の越後正月の話をきく］）

佐野豊太郎　徳田安儀
柴田達夫　胡桃沢勘内
百瀬義夫
加納富次　早川孝太郎
山崎亀代重
小沢寛夫　池上喜作
今井武志　吉江善男

（早川孝太郎全集 第四巻）未来社

昭和8年（44歳）

アチックの談話室で行なわれた、早川孝太郎の九州帝國大學留学を祝う集い。それぞれ民具をつけている。右より前列　藤木喜久麿、原田清、早川孝太郎、折口信夫、岡村千秋。後列　山田明男、小川徹、佐々木嘉一、宮本勢助、高橋文太郎、澁澤敬三、村上清文、袖山富吉、木野内正巳。『伯楽拾遺』より　昭和8年(1933)11月4日。

（全集12　未来社）

北設より参加　原田清　佐々木嘉一

早川さんを偲ぶ

――その内とうとう私も早川さんに連れられ、花祭見物のファンとなり、本郷の中在家（なかんざき）を振り出しに、御園・足込・東薗目・古戸・黒川等に数年間連続出かけ、終いには折口信夫教授・土屋喬雄教授や有賀喜左衛門教授等の先輩学友、また アティック同人多々を誘い出すほどになり、そのお陰で花祭の外にも北設楽中心に一円夏冬にかけて限りなくといってよい程出きまわり、原田清・佐々木嘉一・夏目一平・窪田五郎。

――右下に続く――

↓

夏目義吉等同地方の人々との親しい交りを結ぶに至り、本郷町在の振草川に臨む大崎屋の旧館等、今もってなつかしい想い出の場となってしまった。また早川さんと相談して民具を蒐集し出したのもこの地方が最初である。――

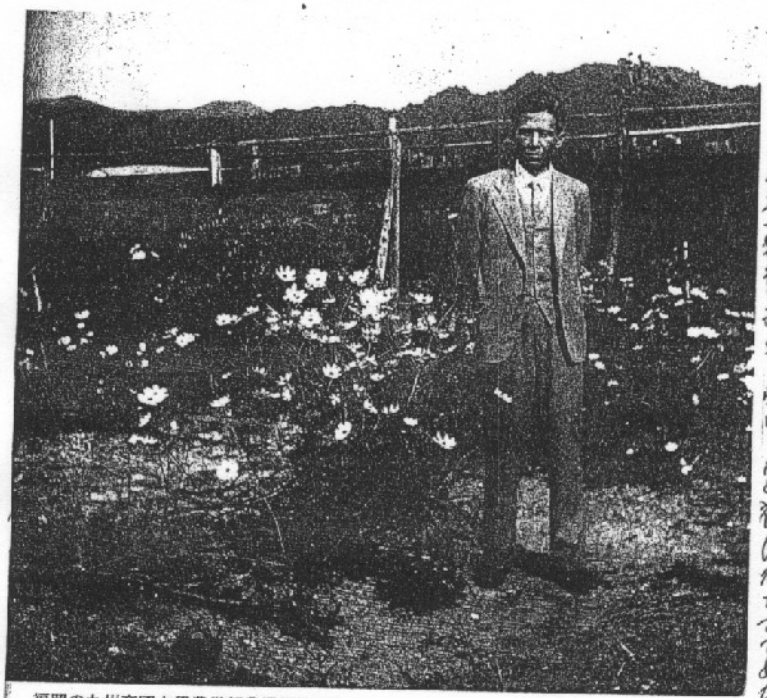
渋沢敬三

（昭和32.12花祭　私家版　岩崎書店　序文より）

――花祭の奥にまた基底にある宗教学的、また社会学的経済史的、（序文）

さらには、農村地理学的面についての解明に不充分な点も感じられたので、早川さんも昭和八年十一月から九大農学部農業経済研究室助手として小出満二教授の指導を受けるため福岡行をすすめた。――

昭和8年（44歳）



福岡の九州帝國大學農学部農業経済研究室にいたころ。早川は昭和8年(1933)11月から約2年半、同研究室の小出満二教授のもとで学んだ。

（全集12　未来社）